

いちじく



第 119 号

2024 年 1 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>



はじめに

鳥は、嘴、目、脚を除いて全身が羽毛に覆われている。我々が見ているのはその羽毛である。その羽毛はしだいに擦り切れ、また脱落し、どんどん生え変わっていく。これを換羽という。夏羽と冬羽が入れ替わることから分かるようにこの換羽は年2回を基本としている。しかし、換羽の仕方は鳥の種類によって、かなり変化があり複雑である。むろんまだ、分かっていない部分も多い。ここでは会員諸氏がよく目にするスズメ目の小鳥に絞って話を進めたい。猛禽、海鳥、シギ・チドリなどは換羽の仕方にそれぞれ別な変化がある。

鳥の羽衣

換羽の話に入る前にスズメ目の鳥の羽衣（うい）について頭に入れておいてほしい。鳥の羽衣の各部位の名称を覚えるのはバードウォッチャーの基本的知識でもある。図1および図2に示す。ここでは換羽を見るのに重要な部分だけを図示した。スズメ目では初列風切は10枚であるが、最外の1枚は小さくて野外では見えない。次列風切は6枚、その内側に三列風切が3枚ある。これらが飛ぶ時に最も重要である。その風切の根元を上から覆う、雨覆には初列雨覆、大雨覆などがある。

尾羽は普通12枚であるが、ウグイス、ヤブサメでは10枚である。

ヒナからの換羽順序

まずはヒナから成長する段階での換羽を見てみよう。巣の中の卵から生まれた鳥は全く裸か、あるいは少々の幼綿羽（Natal DownあるいはNestling Down）に包まれている。どちらの場合もその後、急速に幼綿羽が伸びる。ふわふわと綿毛に包まれたヒナである。この状態のヒナは巣の中にいる。

目次

鳥の換羽について-----	2
表紙の言葉-----	2
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化	
—あとがき— -----	6
日本鳥学会 2023 年度大会に参加 -----	11
2023 年 タカの渡り記録-----	12
中部内陸のタカ渡りと庭田山 -----	14
推しの一枚 サンカノゴイ -----	15
野鳥記録-----	16
理事会報告-----	20
事務局だより-----	20
「第13 回くるくる環境フェスタ IN ベルファーム」に参加しました！ ----	21
探鳥会予告-----	21
探鳥会報告（2023 年 8 月～ 2023 年 10 月）--	22
編集後記 -----	24

表紙の言葉

エナガ

度会町 小坂 里香

ごく身近にいるけれど、小柄な身体と素早い動きで、なかなか人に気づいてもらえないエナガ。

早春にコケやクモの巣などで独特のふわふわの巣をつくって子育てし、初夏にはたくさん子どもたちを連れて、にぎやかに鳴きかわしながら森や林を飛び回ります。小さな嘴で木の幹に隠れている昆虫をつついたり、葉っぱにぶら下がったり。バードウォッチャー以外にも大人気の亜種シマエナガに比べると、立派な太い眉毛があるだけの違い。なぜかシマエナガよりマイナーな存在ですが、愛らしいしぐさはバードウォッチャーのアイドルです。うちの小さな庭に来てくれた群れの中の一羽をパステルで描いてみました。

千葉県にはちょっと変わった風貌のチバエナガというのがいるらしい。いつかその子たちにも会ってみたいです。

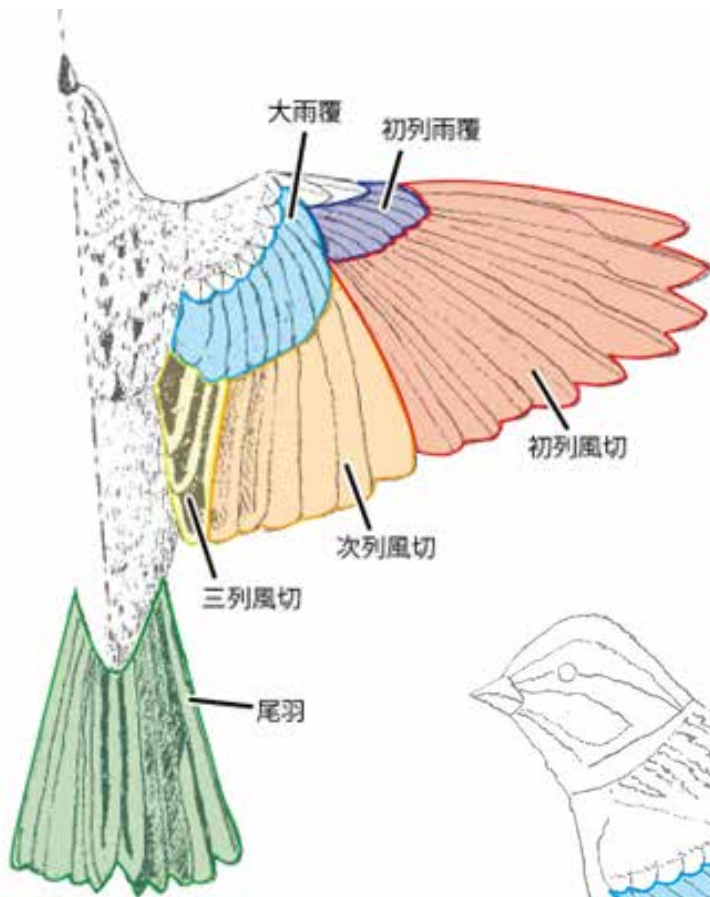


図 1. ホオジロの羽衣 I

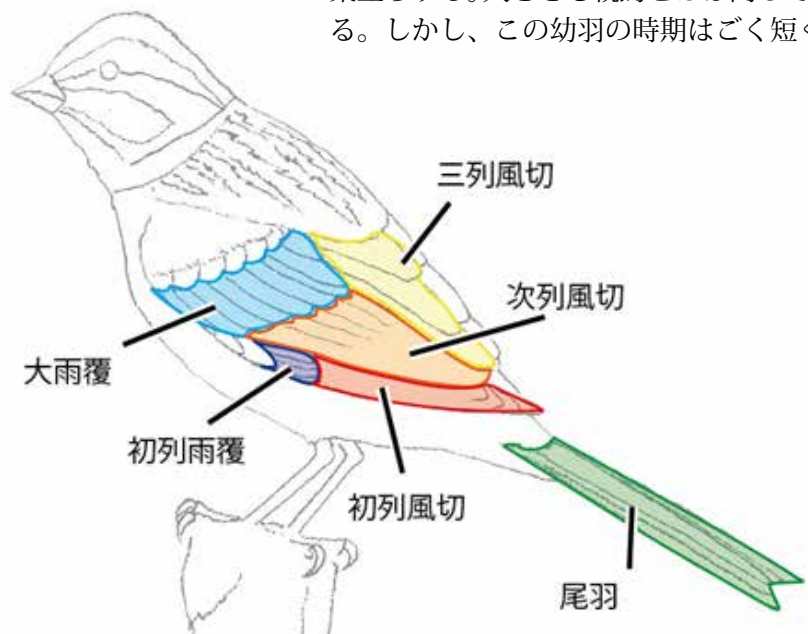


図 2 ホオジロの羽衣 II



図 3 ノゴマ 性不明・幼羽 2019/8/12 北海道 帯広市
(今野 怜氏提供)
頭部および背に淡色斑点がある。

次に幼羽 (juvenile: J) が生えてくる。この幼羽は親鳥の羽と色も形も違い、一目で幼鳥と分かる場合が多い。アカハラ、ノゴマ (図 3) などのツグミ類、オオルリ (図 4)、キビタキなどのヒタキ類などでは野外で普通に見る鳥の姿にない、淡色の斑点が頭部や体があり、一目で識別できる。ノゴマのこのような姿は繁殖期の北海道でも、目にする機会はそう多くない。

ホオジロ類の幼羽では顔に種特有の模様が現れず、雌雄は判らず、種名の判断に迷う場合もある。この幼羽の段階では風切や尾羽も揃い、一応飛べるようになり、巣立ちする。大きさも親鳥とほぼ同じである。しかし、この幼羽の時期はごく短く、



図4 オオルリ オス・幼羽 2006/9/3 三重県 青山高原 頭部、背に淡色斑がある。



図5 アオジ 性不明・幼羽 2015/7/11
北海道帯広市（今野 怜氏提供）



図6 ホオアカ 性不明・幼羽 2021/9/22
北海道音更町（今野 怜氏提供）

数週間で、行動も巣の近くに限られ、野外でこの幼羽の姿を見ることはやや稀であろう。ヒナは巣立ち後も短期間は親鳥から給餌を受けるがそのうち自立して生活する。

第1回冬羽

その頃、もう第2回目の換羽（幼羽後換羽）が始まっている。それが生え揃った段階が第1回冬羽（First Winter: 1W）と呼ばれる。この換羽は多くの場合、頭や体は換羽するが、翼や尾羽の一部、あるいは全部に幼羽を残しているのが、部分換羽といえる。ただし、種によって、換羽の程度や換羽する部位は様々で、かつ、個体間でも差があるので、ややこしい。渡りをする種ではこの1Wの姿で渡るものが多い。この時期、すなわち秋、当年に生まれた1Wの鳥と繁殖を終えた親鳥の2つのタイプの鳥がいることになる。この1Wの段階では、大きさも羽毛の色、形も繁殖を終えた親鳥と区別つきにくい。バンダーが標識調査で鳥を手にとって見た場合は別だが、特に野外では区別のつかない場合が多い。この識別については続編で詳細に述べる予定である。

第1回夏羽

翌春になると一部の鳥では夏羽への換羽（繁殖前換羽）があり、第1回夏羽（First Summer: 1S）となる。この繁殖前換羽は多くの場合、部分換羽であり、翼や尾羽は換羽しない。オオルリやキビタキのオスでは体羽が換羽し、初夏に見かけるあの鮮やかな色彩になる。

この時期、初夏、前年に生まれた鳥は1Sである。一方、2回目の、あるいはそれ以上の繁殖期を迎えた個体、すなわち2S、3S等は互いに区別のつかない場合が多く、まとめて成鳥夏羽（Adult Summer: AS）と認識される。

スズメ目の多くの鳥はこの1Sの状態、つまりほぼ1歳で繁殖可能になる。ただし、スズメ目でもハシボソガラスやハシブトガラスなど大型の鳥は、繁殖までにもう1年かかるようである。さらにカモメや海鳥、大型の猛禽などでは繁殖可能になるまで、何年かかる種がある。

成鳥冬羽（AW）

この第1回目の繁殖が終わると冬羽への換羽（繁殖後換羽）となる。渡りをする種の多くは渡る前に換羽を終え第2回冬羽（Second Winter: 2W）となるのだが、スズメ目では、通常この繁殖後換羽の段階で幼羽の全てが脱落し、換羽する。すな

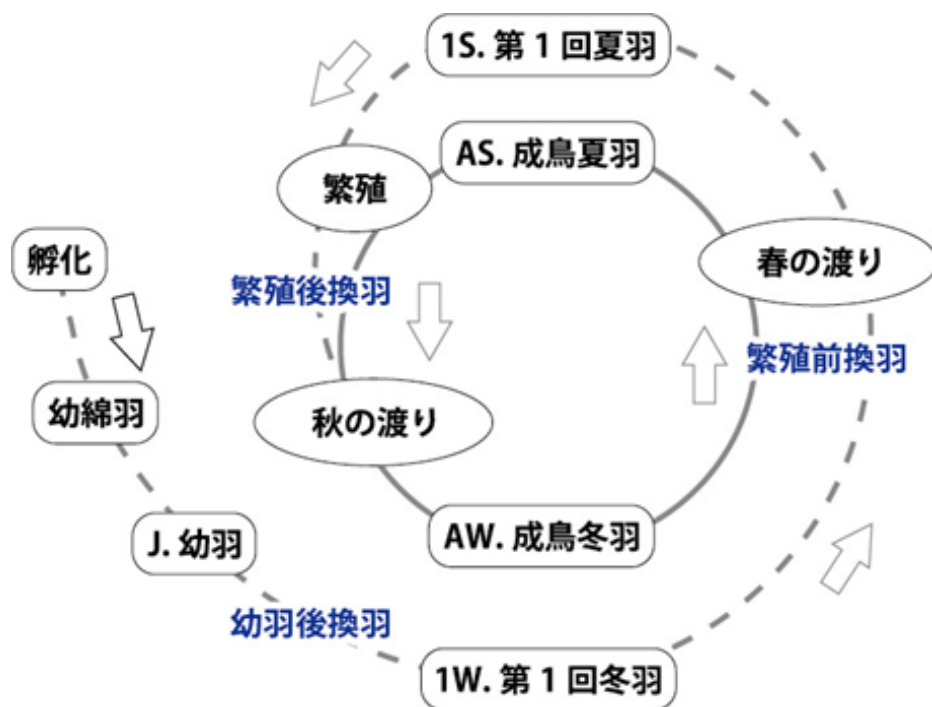


図7 換羽サイクル 点線は1歳未満の鳥のサイクル、実線は成鳥のサイクルを表す。

わち完全換羽である。したがって、2W以上の個体、3Wなどと全く区別つかない。故にこれらの個体はまとめて成鳥冬羽 (Adult Winter: AW) として扱われる。以降2W以降の個体を本稿では成鳥として著述する。

以上に述べたように、鳥の換羽は常時進行するのではなく、多くの場合、鳥の成長段階の限られた時期に進行する。換羽そのものにはエネルギーを使わざるを得ない。また、翼の換羽では運動能力が一時低下する。渡りや繁殖など多大なエネルギーを使う時期には重複しないように仕組みられているようである。

以上に述べた換羽の全体を図7に示す。

用語の問題

日本語での幼鳥、成鳥の区別は必ずしも明確ではない。この稿では幼鳥という言葉を使わないようにした。強いて言えば、幼羽 (Juvenile plumage) の段階の鳥が幼鳥 (Juvenile) である。第1回冬羽 (1W) の個体をどう呼ぶか、英文の書物ではそのまま First Winter (1W) としているものが多い。ここでもそれに従った。ただ、日本の鳥類標識調査では1Wのものも、幼鳥 (Juvenile: J) と表すことが多い。また、一般にも図鑑などでも成鳥と区別できる鳥という意味で幼鳥という言葉をよくつかわれている。一方、夏羽では2S以上は区別できないので成鳥夏

羽 Adult Summer: AS でよいであろう。種によっては1Sも2S以上と区別できないので成鳥 Adult と呼ばざるを得ない。本稿では成鳥という用語は2W以降の鳥に用いた。用語の問題はこれからも、論議の対象であろう。本稿では重要な用語には英文表記を加えたが、表記はここでは英国式とした。米語では異なる用語があるので、留意されたい。英文の書物には対照表があるので参照されたい。

あとがき

最近、鳥の換羽についての知識が重要であるが、適当な書物は見当たらないことに気づいた。それで、著者の知識も十分といえないが、著者なりに本稿をまとめてみた。読者の方々のご批判を乞う。なお、本稿中の写真の多くは鳥類標識調査中に知見を広めるため、撮影したものである。むろん、撮影後に放鳥した。

謝辞

山階鳥類研究所協力標識調査員 今野 怜氏には原稿を読んでいただき、多くの貴重な意見、示唆をいただいた。またいくつかの写真を使わせていただいた。また、三曾田 明氏には模式図や換羽サイクル図の作成に協力をいただき、記述についての相談に乗っていただいた。ここにお礼申し上げる。

シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化

—あとかき—



津市 今井 光昌

2012年9月15日発行の「日本鳥類目録改訂第7版」によれば、日本では74種のシギ・チドリ類(チドリ科15種、シギ科59種)が観察されています。2024年9月には「日本鳥類目録改訂第8版」の発行が予定されており、観察数や種の分類も変更されると思います。三重県では日本野鳥の会三重が2023年1月に発行した「三重県野鳥目録」で、64種のシギ・チドリ類が観察されています。チドリ科12種、ミヤコドリ科1種、セイタカシギ科2種、シギ科46種、レンカク科1種、タマシギ科1種、ツバメチドリ科1種の64種です。シギ・チドリの観察を始めて20年程の間に、三重県内で撮影した

61種と、県外で撮影したミズカキチドリ(愛知県)、ヒメウズラシギ(愛知県)、コバシチドリ(岡山県)の3種を連載第32回までに紹介してきました。

シギ・チドリには地味な冬羽から鮮やかな夏羽に換羽し、幼羽、冬羽、夏羽の羽模様の違いが明瞭な種もいれば、幼羽も成鳥羽も似通った地味な羽色の種も多い。年齢による羽衣の変化に関心を持ち、その奥深さと面白さに魅了されてきました。三重県内の湿地に訪れるシギ・チドリの日々の観察日記を図鑑風にまとめてきたものを編集し、日本野鳥の会三重の「会報しろちどり」に連載してきました。

シギとチドリの違い

シギ・チドリと言ってもシギとチドリには大きな違いがあります。その一つは趾(あしゆび)の数です。シギはミユビシギ(3趾)以外、4趾あります。一方、チドリは後趾がなく3趾が普通ですが、ダイゼン、タゲリ、ケリなど4趾ある種もあります。なお、ミヤコドリ科、セイタカシギ科は3趾で、レンカク科、タマシギ科、ツバメチドリ科は4趾です。

嘴や足の長さにもシギとチドリの違いが見られます。シギは歩きながら嘴を泥の中に突っ込んだり、地面を突いたりして餌を探しています。長い嘴や上に反った嘴、下方に湾曲した嘴など、シギ類は多様な嘴の形状を持っており、嘴を利用して餌を見つけているのです。しかも嘴の先端部分を曲げることが出来ます。嘴の先端部分に神経があって触角の

役目を果たしているそうです。そのため、泥の中や水の中でも目で見ることなく餌を探せるのです。しかも、嘴の先端部分で好きな餌を選んで探すことまで出来るようです。数種の貝が混在している河口干潟の水際で、オグロシギ(図1~2)とオオソリハシギ(図3)が嘴を水中に差し込み、アケミ貝のみを次々に捕食していく、目では見えない水中や、土中の貝を、驚いたことに嘴で他の貝と選別しながら捕食しているのです。

一方、嘴や足が比較的短いチドリは餌を探すのに歩いては立ち止まり、走っては立ち止まりを繰り返しながら、餌を見つけると走り寄り、カニやゴカイを捕まえています。チドリは干潟の水のないところで餌を目で見つけているのです。



図1 オグロシギ



図2 オグロシギ



図3 オオソリハシギ



図4 オオソリハシギ

シギ・チドリは多種多様な生き物を捕食していますが、その場に合わせて捕りやすい生き物を、その中でも好みの生き物を選んで食べています。この日の干潟では、ミヤコドリが普段は好んで食べているシオフキ貝ではなく、マテ貝のみを捕食していました（図5）。泥地の浅場でカニではなくアナジャコばかり捕食していたハウロクシギ（図7）。砂浜海岸

でコガネムシの幼虫ばかり捕食していたオオメダイチドリ（図8）など、他の餌となる生き物がいても、その日、その場所の、より好みの獲物を優先して捕食しています。図3のオオソリハシシギは嘴の先端部分を反らして貝をつまんでいます。図4のオオソリハシシギは嘴を反らして餌場で争っていました。嘴は柔軟で、神経が通っており、反らすことができます。



図5 ミヤコドリ



図6 ハウロクシギ



図7 ハウロクシギ



図8 オオメダイチドリ

図6～7のハウロクシギはアナジャコの巣穴に長い嘴を突っ込み、アナジャコを捕らえています。松阪市周辺の泥地の餌場でアナジャコを捕食するのはシギの中でも嘴が特に長いハウロクシギとダイシャクシギのみです。嘴の短い種は、地面の表面もしくは表面近くの餌を捕食しています。多くの種が集まる干潟では、餌場での競合を避けるために、鳥

たちは様々な嘴の形状を持ったと言われていす。足の長さでも違いが見られます。足の長いシギは、足の短いシギやチドリより水深が深いところまで餌を探れるし、足の短い小型シギは水の中に入るのは少なく、干潟や水田の地面で餌を探っています。採餌方法は嘴の形状や足の長さで変わります。

シギとチドリの識別

種の識別に迷うことがあります。そのため、類似している種がいる場合は特に、種の特徴が表れる部位をできる限り撮影しておくことにしています。そうしたことを常に意識して撮影することで、識別の迷いを減らすことができます。2023年9月に渡来

したカラフトアオアシシギも尾羽を意識して撮りました。図9～11はカラフトアオアシシギ、アオアシシギ、コアオアシシギ3種の尾羽模様です、体形や大きさなど他の識別点がはっきりしない場合でも、尾羽さえ確認できれば種の判別ができるからです。



図9 カラフトアオアシシギ



図10 アオアシシギ



図11 コアオアシシギ



図 12 クサシギ



図 13 タカブシギ



図 14 イソシギ

尾羽の比較

図 12～14 はクサシギ、タカブシギ、イソシギの尾羽です。尾羽の模様の違いで 3 種を識別できます。

嘴や足の形状・色味だけでなく、体の上・下面、腰や背、翼の斑模様など、種による各部位の特徴の違いを捉えていけば、酷似している一部の種を除き、シギ・チドリの種の識別は難しいものではなくなります。



年齢による羽衣の変化

シギ・チドリの識別の難しさは種の識別より、年齢の識別にあります。幼羽から成鳥羽まで、各年代の羽の特徴が明瞭な形で残っていることが少ないからです。新しい羽も日の経過とともに摩耗し、原形が崩れて、これは幼羽なのか、冬羽なのか、夏羽なのか、判別することが難しくなります。

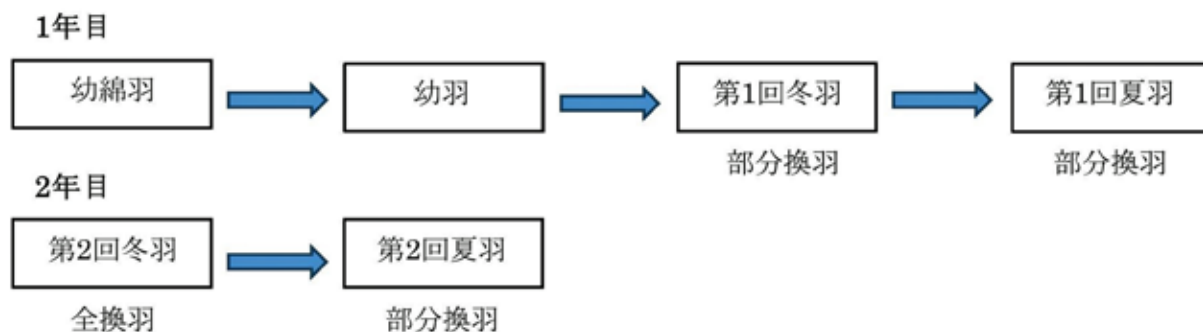
スズメ目などの一部の鳥を除き、多くの鳥は生まれたときから柔らかい綿羽（幼綿羽）に覆われています。シギ・チドリの雛も生まれた時は綿羽に覆われ、1 か月ほどで成鳥羽と同じ作りの羽（幼羽）で全身が覆われます。幼羽は成鳥羽と類似している場合もありますが、サブターミナルバンドがあったり、軸斑の褐色味が強かったり、成鳥羽より羽先が尖っていたり、羽が小さかったりなど、仔細に観察するとそれぞれの種ごとに色々な特徴を持っています。

春から初夏に生まれた雛は約 1 か月後に幼羽に生え換わり、秋には 1 回目の換羽を行います。幼羽よりも丈夫な成鳥羽とほぼ同質の羽に変わります。この 1 回目の換羽は部分換羽で、雨覆、風切羽、尾

羽などに未換羽の幼羽が部分的に残ります。これが第 1 回冬羽です。第 1 回冬羽の換羽を終えて、春になると 2 度目の換羽を行います。第 1 回夏羽の換羽です。第 1 回夏羽も第 1 回冬羽と同様に一部の羽を換羽しない部分換羽です。換羽の範囲は種によって異なったり、個体によって異なったりします。多くのシギ・チドリの部分換羽では雨覆、風切、尾羽に古い羽を残しますが、それらも全く換羽しないというのではなく、部分的に換羽します。換羽の範囲は種による違いもありますが、個体による差もあります。

幼羽から第 1 回冬羽、第 1 回夏羽と 2 度の部分換羽を終えた幼鳥は、秋に 3 度目の換羽を行います。これが第 2 回冬羽です。第 2 回冬羽は全ての羽が生え換わる完全換羽です。翌春に第 2 回夏羽に換羽（部分換羽）し、秋になると第 3 回冬羽に換羽（完全換羽）します。成鳥は部分換羽と完全換羽を生涯繰り返していくことになります。換羽時期は春も秋も種による差が見られ、同種でも個体により換羽時期に 1～2 か月の差が見られます。

年齢による換羽の進み



3年目以降は冬羽では全換羽、夏羽では部分換羽と生涯繰り返していく

換羽とは古くなった羽が新しい羽に生え変わることです。羽が新しい間は幼羽、冬羽、夏羽にかかわらず各世代の羽の特徴が明瞭ですが、羽が古くなり原形が崩れると、幼羽、冬羽、夏羽の識別が難しくなります。秋に換羽した幼羽も冬羽も、冬の後半から春にかけて擦れ(摩耗)が激しくなってきます。第1回冬羽個体なのか、成鳥冬羽個体なのか、年齢識別が難しい時期になります。そのような時には、

- 幼羽は柔らかく成鳥羽より摩耗が早い。
- 第1回冬羽は部分換羽で成鳥冬羽は完全換羽である。

- 第1回冬羽では、幼羽と冬羽に摩耗差が出る。
- 成鳥は冬羽換羽で全ての羽を同時期に全換羽しているため、各羽の擦れにばらつきがなくほぼ平均して摩耗している。

- 第1回冬羽では背や肩羽の冬羽より雨覆や三列風切に残る幼羽の擦れが目立つ

などを識別の手がかりとしています。科学的な分析なしに年齢識別を見た目で行う以上、そうであろう、そう考えられるという程度の識別にならざるを得ません。なお、第1回夏羽では幼羽、冬羽、夏羽の3世代の羽が混在します。

綿羽から幼羽

三重県で繁殖したシギ・チドリの内、雛から幼鳥までの成長過程を観察できたのはコチドリ、イカルチドリ、シロチドリ、ケリ、セイタカシギ、タマシ

ギの6種です。観察した6種は綿羽から幼羽に生え換わるまで1か月余りかかりました。図15-18は綿羽から幼羽まで、シロチドリの成長過程の羽衣です。



図15 孵化直後の雛



図16 孵化後13日



図17 孵化後20日



図18 孵化後34日

雛はふわふわの綿羽に覆われています。幼羽に生え換わる準備がすでに始まっていると思われます。綿羽が抜け幼羽の一部が外見から分かるまでに1週間から10日ほどかかります。雛が飛べるようにな

るのは孵化後、約4週間から5週間です。三重県で繁殖している他のシギ・チドリ類もほぼ同じで、綿羽から幼羽に生え換わり、十分な飛翔力がつくまで孵化してから1か月余り要します。

例外個体

野鳥の生態や識別に絶対はなく。必ず例外があります。嘴が上に反ったセイタカシギ(図19)がいたり、下方に湾曲したアカアシシギ(図20)がいたり、

体が赤いトウネン(図21)がいたり、白いコチドリ(図22)がいたりします。



図19 セイタカシギ



図20 アカアシシギ



図21 トウネン



図22 コチドリ



図23 厳寒期のムナグロ

図23は撮影日がなければ通常のムナグロ夏羽個体に見えます。1月28日の撮影です。厳寒期の1月から2月にかけて伊勢市で滞在していたムナグロです。厳寒期に夏の姿で、通常の換羽からはみ出した個体です。図鑑からはみ出した例外個体が稀にいます。

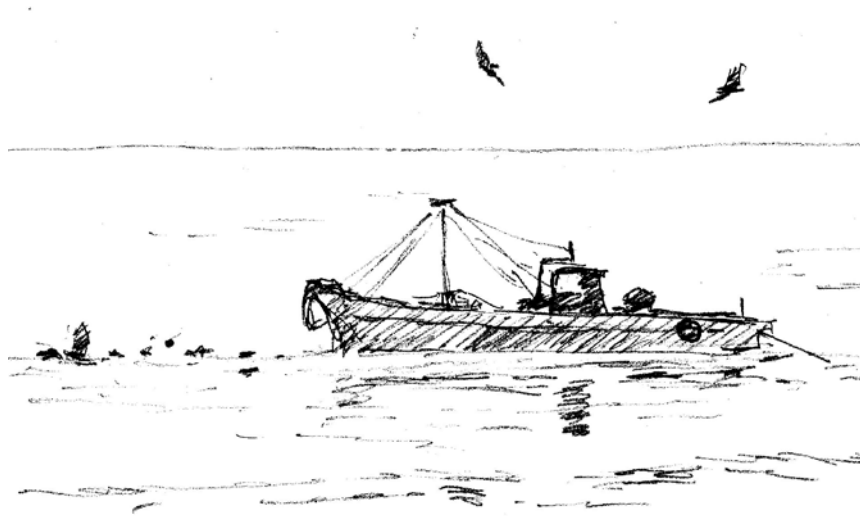


図24 謎シギ

五主海岸に現れた図24のシギは合致する種がおらず図鑑では種の特定は出来なかった。このような個体も稀にいるということです。雑種であろうということだけで、何と何の雑種であるかは推測の域を出ず、不明のままになっています。

連載の終わりにあたって

会報シロチドリに「シギ・チドリの年齢・季節による羽衣の変化」と題して8年間にわたり連載してきました。シギ・チドリの羽衣の変化による年齢識別を、その時々での筆者の見方・考え方を述べてきました。識別について正確さを欠くことがあるかもしれません。識別の最終判断は皆様ご自身の目でお願ひするとして、本連載記事が皆様の識別の一助になればうれしい限りです。最後にシギ・チドリの情報・識別についてご教示いただいた方々に深くお礼申し上げます。



町屋海岸



今年(2023年)9月15日(金)から18日(月・祝日)に石川県金沢市の金沢大学角間キャンパスなどで開催された日本鳥学会2023年度大会に参加し、木曽岬干拓地のチュウヒ等の調査結果について発表しました。

大会は4日間にわたって開かれていましたが、都合で15日の夜に金沢着、16日と17日午前の行事に参加し、夜に帰宅しました。発表は17日の朝に行いました。

学会大会の様子は参加者400名程度、参加者および発表者は大学の教員・学生、各種研究機関の職員、コンサルタント会社の職員、公益財団法人日本野鳥の会自然保護室や各地の連携団体(日本野鳥の会三重はこの中に含まれます)、野鳥を調べている高校生などです。発表は口頭発表、ポスター発表があります。参加者の多くが、どちらかの形で発表していますが、発表しない参加者もいます。発表できるのは、高校生以下を除き、学会員に限られます。ただ、参加することは参加費を払えば学会に所属していない人も参加可能です。

今回、発表にすることになった経緯は以下のとおりです。私はだいぶ前から日本鳥学会に入会し、2度ばかり大会に参加していました。今回は久しぶりの参加です。木曽岬干拓地で探鳥会が開催されるようになって30年、木曽岬干拓地への立ち入り調査を開始してから20年以上が経過し、たくさんのデータが集まっていました。ときどき、会報「しろちどり」に発表はしていたのですが、どこかでまとめなければいけないと思っていました。日本鳥学会の大会が金沢大学で開催されると聞き、今までに木曽岬干拓地の調査メンバーなどと調べたデータを一部でも発表しようと思いました。

大会の中で興味を持った発表は以下のようなものがありました。

地球温暖化や耕作放棄地が、鳥類の生息にどのよ



木曽岬干拓地の保全区とチュウヒ

うに影響を及ぼすかという内容の発表が何点ありました。この発表の基礎データには、私たちの会のメンバーも協力した全国鳥類繁殖分布調査も使われていました。涼しいところで繁殖するアオジは日本で減少し、ロシアで増加したそうです。また、耕作放棄地が増えたことで樹木が増えて、一般的に草原の鳥が減少し、森林の鳥が増加したそうです。絶滅危惧種では、チゴモズやアカモズがとても厳しい状況であることもわかりました。

野鳥の中にはアリ浴を行うものがあり、昔はダニをとるためなどと言われていました。実は、アリの出す有機化学物質デンドロラシンを羽毛に取り込んで、吸血性双翅目の昆虫(アブやカなど)に忌避行動をさせることがわかったそうです。デンドロラシンは現在特許を出願中だそうです。やがて虫よけスプレーの成分として売り出されるのかなと思いました。鳥類に関係した研究で直接人の役に立つのだなと感心しました。

最新の研究発表や地域で継続して調べた研究発表など、良い刺激をたくさんもらいました。



2023 年 タカの渡り記録

四日市市 笹間 俊秋

2023 年 9 月の気候は気温が下がらず夏日がつづいていました。三重県の各地で有志によりタカの渡りの観察が行われましたが 9 月中旬は渡りの数が少なく、気温が落ち着いてきた 10 月に入って本格的に渡って行くという傾向でした。

三重県以外では内陸方面の長野県白樺峠は 9 月 24 日に 4,847 羽を記録し最初のピークをむかえました。岐阜の金華山は 25 日に 645 羽、滋賀県の猪子山で 24 日 1,075 羽、25 日 2,575 羽を記録しています。一方太平洋側の伊良湖岬では 10 月 3 日に 1,024 羽、7 日 671 羽を記録、奈良県の宇陀市都市公園は 3 日に 2,191 羽と 10 月に入りピークをむかえました。

この傾向は三重県でも同じで北勢地方の庭田山では 9 月 24 日がピーク。一方南勢の伊勢やすらぎ公園は 10 月 3 日と 7 日、相津峠・高見峠は 10 月 7 日がピークでした（各地の図参照）。このように内陸方面は 9 月 24 日から 25 日、太平洋側は 10 月 3 日、7 日に最多を記録しています。

しかし、ピーク日は同じでも例年より数が少なかったという印象でした。気温・風向きによってルートが変わっていた可能性もあり、一概にタカ



渡りのサシバ

の数が減ったということでもなさそうです。三重県で渡りの観察している場所は 3 か所しかないので、もっと観察地点を増やしてデータを取り渡りのルートを解析する必要もありそうです。

データ参考：タカの渡り全国ネットワーク

相津峠、高見峠 タカの渡り（2023 年）

日 付	場 所	天候	時 間	サシバ	ハチクマ	ツミ	ハヤブサ	クマタカ	計
9/17(日)	相津峠	曇り	9:50-10:00	4					4
9/18(月)	相津峠	晴	8:00-10:00	3		2		2	7
9/29(金)	高見峠	晴	9:30-11:30	1	1		1		3
9/30(土)	相津峠	晴	8:30-11:00	13			1		14
10/1(日)	高見峠	雨	8:00-10:00						0
10/6(金)	高見峠	晴	9:30-13:00	11	1		1	1	14
10/7(土)	高見峠	晴	9:30-13:30	198	3		1	1	203
10/8(日)	相津峠	雨	8:00-10:00						0
合 計				230	5	2	4	4	245

10 月 7 日 探鳥会

（観察者：西村 四郎、中村 真理子 他）

伊勢やすらぎ公園 タカの渡り (2023 年)

日 付	天 候	時 間	サシバ	ハチクマ	ツミ	中型タカ	小型タカ	計
9/23(土)	曇	07:30～09:00	0					0
9/24(日)	曇～晴	07:50～10:00	0					0
9/25(月)	晴	08:00～10:00	2					2
9/26(火)	晴	07:30～10:00	0					0
9/27(水)	晴～曇	07:55～09:30	0					0
9/28(木)	快晴	07:35～09:30	0					0
9/29(金)	快晴	07:40～10:00	0					0
9/30(土)	快晴	07:30～09:00	12	1	1	ノスリ 1		15
10/1(日)	曇	07:00～10:30	15			ミサゴ 1	ハイタカ 1	17
10/2(月)	快晴	06:50～09:00	0					0
10/3(火)	晴	06:30～10:00	82	2				84
10/4(水)	天候不良	観察せず	—					—
10/5(木)	曇	07:30～11:00	6	2				8
10/6(金)	曇	07:45～11:00	30		1	ハヤブサ 1	チョウゲン 2	34
10/7(土)	曇	08:00～11:00	45	3				48
10/8(日)	曇～小雨	07:40～09:15	1					1
10/9(月)	天候不良	観察せず	—					
10/10(火)	曇～晴	07:40～10:00	4	1				5
10/11(水)	晴	06:30～11:00	12			オオタカ 1	チョウゲン 2	15
10/12(木)	快晴	07:00～09:30	0				小型タカ 1	1
合 計			209	9	2	4	6	230

9月30日、10月1日 探鳥会

(観察者：中西 章、濱屋 勝則、濱口 雅也、西村 泉 他)

今年もサシバやハチクマなどタカの観察数は少なかったのですが、天候が崩れる前後によく飛ぶ傾向が見られました。今年のピークは2回、10月3日、10月7日にまとまって渡っていきました。

庭田山 タカの渡り (2023 年)

日 付	天候	時 間	サシバ	ハチクマ	ノスリ	不明タカ	クマタカ	その他	計
9/13(水)	晴れ	12:30-15:00	1	2	1	3		トビ 2	9
9/19(火)	晴れ	11:00-14:55	19			8		ミサゴ 1	28
9/23(土)	晴れ	09:00-12:22		2		3		トビ 2	7
9/25(月)	晴れ	10:10-14:20	14		2	6	1	トビ 2	25
9/26(火)	晴れ	10:00-13:40	3	6	11	4	2	トビ 3	29
9/27(水)	晴れ	10:50-13:40	5	1		2	1	ツミ 1、トビ 3	13
9/29(金)	晴れ	11:00-14:30	5	6	1	11		トビ 1	24
10/2(月)	晴れ	10:30-14:15	3	2	2	3	1	ミサゴ 1	12
10/3(火)	晴れ	10:50-14:10	4	4	5	10		ツミ 1、トビ 4	28
10/6(金)	晴れ	11:20-15:15	3		1	4		トビ 1	9
合 計			57	23	23	54	5	22	184

9月23日 探鳥会中止

(観察者：笹間 俊秋)

三重県側の二ノ瀬峠が道路工事のため、岐阜県側からしかアクセスできず観察日が少なかった。ピークは9月24日でしたが、他所で探鳥会があり観察できず。今年は全体的に低調な渡りとなりました。



伊良湖岬を通過するタカ渡りは古くから有名であり、その群が通過するであろう伊勢周辺、南勢周辺のタカ渡りは吉居さん夫婦を中心とした南勢の会員により、詳しく調査された。その結果として内陸の一定の地点を通過するのではなく、その時の風向き、天候などにより様々ルートをとるのではないかと想定された。詳しくは「しろちどり」72号(2012/7)を見ていただきたい。

一方、内陸にもハチクマ、サシバなどの通過がしばしば見られた。近年注目されだしたのは北勢地方の庭田山である。庭田山は養老山地にあり、県道南濃北勢線が通過し、岐阜県側に降りることができ、二ノ瀬越(419 m)とも言われ、峠付近岐阜側に庭田山山頂公園がある。

庭田山を通過するタカの群はどこから来て、どこへ向かうのであろうか？ 周辺の著名なタカ渡り地点を調べてみた(図1、表1)。白樺峠、金華山、庭田山というルートが浮かび上がる。ただ、白樺峠—金華山間は長距離でどこを通るのかまだ、解明されていない。山中のルートで調査はかなり困難であろう。また、白樺峠を通過したタカが金華山を通らないルートも想定できよう。

一方、滋賀、京都側では猪子山、庚申山、岩間山の3地点が知られている。位置関係からして渡るタカは滋賀の庚申山、猪子山のどちらかを通過し、京都の岩間山へ向かうのではなかろうか？

また、これら5地点の位置関係からして、2つの疑問が生じる。第一は金華山から滋賀へ抜けるルートの庭田山だけではない可能性も考慮すべきであろう。周辺には鈴鹿山脈、養老山地、伊吹山地が連続するが、関ヶ原周辺は低地であり、ここを通過するのではなかろうか？

第二は、庭田山を通過し、三重県側に入ったタカは鈴鹿山脈を越さなければならないがどこで越すのか。地形的には北部の鞍掛峠、御在所山南側の武平峠が考えられるが、これまで、調査されていない。今後の研究課題であろう。特にこの課題は当会の会員によって解明されることが期待される。



図1 中部地方内陸のタカ渡り調査地

表1 中部地方内陸の主なタカ渡り観察地点

		標高	備考
白樺峠	長野県	1660 m	乗鞍岳山頂の東約9 km
金華山	岐阜県	329 m	岐阜市内、長良川に面する
庭田山	三重県/岐阜県	419 m	養老山脈の二之瀬越
猪子山	滋賀県	268 m	JR 能登川駅の南約800 m.
庚申山	滋賀県	406 m	山頂に広徳寺がある信仰の山
岩間山	京都府	443 m	瀬田川の右岸、山頂に正法寺がある

推しの一枚

サンカノゴイ

伊勢市 中西 章



撮影者のコメント

サンカノゴイは芦原にいる写真が多いと思いますが、運よく水面に浮かぶ写真を撮影することができました。この後すぐに芦原の中に飛んでいきました。

撮影：中西 章

サンカノゴイ

全長は約 70cm、翼開長は 125-135cm、ずんぐりとした体形の大型のサギ類。

ユーラシア大陸中部などで繁殖、北海道などでも一部繁殖。冬期は東南アジアなどで越冬、日本でも本州以南に冬鳥として少数飛来。

(編集部)

あなたの自慢の「推しの一枚」を募集します。

新たに「推しの一枚」と題して 1 枚の野鳥写真とごく簡単なコメントで記事にいたします。写真の美しさだけでなく、話題性も重視したいと考えています。次号より、会員からの投稿をお待ちしています。

(編集部)

野鳥記録 (2023 年 8 月 2 日から 2023 年 11 月 15 日までに報告があったもの)



鳥の種類名	個体数	観察日	観察場所	雄 / 雌 / などの区別	記録報告者氏名	脚注
カヤクグリ	1	2016/11/07	菰野町 御在所岳山上公園		佐野 一磨	1
クサシギ	1	2023/08/08	紀宝町大里		沢本 浩志	2
コシアカツバメ	3	2023/08/08	御浜町下市木		沢本 浩志	3
イカルチドリ	8	2023/08/11	紀宝町大里		沢本 浩志	4
ウミネコ	1	2023/08/16	津市 中河原海岸	成鳥	鈴木 健真	5
ツバメ (白化個体)	1	2023/08/17	津市一志町		山下 博寿	6
アオサギ	1	2023/08/20	四日市市 垂坂公園		今西 純一	7
チュウジシギ	1	2023/08/25	松阪市 三渡川河口	成鳥	西村 四郎	8
カラフトアオアシシギ	1	2023/09/12	松阪市		沢本 浩志	9
クサシギ	1	2023/09/15	紀宝町大里		沢本 浩志	10
ノビタキ	1	2023/09/15	紀宝町大里		沢本 浩志	11
アカエリヒレアシシギ	1	2023/09/15	明和町	幼鳥	中西 章	12
ハジロコチドリ	1	2023/09/20	四日市市 鈴鹿川派川		笹間 俊秋	13
トウゾクカモメ	1	2023/09/21	四日市市 鈴鹿川派川		笹間 俊秋	14
オオアジサシ	22	2023/10/12	鈴鹿市		笹間 俊秋	15
ヒクイナ	1	2023/10/14	津市安濃町		平井 正志	16
ウズラシギ	3	2023/10/18	四日市市 高松海岸		笹間 俊秋	17
サンカノゴイ	1	2023/10/20	伊勢市		中西 章	18
タカブシギ	1	2023/10/24	御浜町下市木		沢本 浩志	19
ウズラシギ	1	2023/10/26	御浜町下市木		沢本 浩志	20
ヒドリガモ	1	2023/11/03	鈴鹿市	雌	今西 純一	21
コクガン	1	2023/11/04	松阪市		今井 光昌	22

脚注

- 過去の観察記録。御在所山上公園におけるカヤクグリの確認記録。
- 水の張った水田で餌を探していた。
- ヒメアマツバメと一緒に飛んでいた。
- 水田にある休耕地で見かけた。
- カラーリング付き個体。左脚にメタルリング、右脚に赤カラーリングに A512 の文字。
山階鳥研へ報告済。
- 稲刈り後の田んぼで他のツバメと飛行
- アオサギが肩までどっぷりと水につかっていた。よほど暑かったのか。最後には潜ってしまい
そうな勢いでした。
- ジシギの判断は迷いますが、尾羽を確認できた。
- 干潮時の干潟で見かけた。
- 田んぼに流れる用水路で見た。
- 田んぼの柵の上に止まっていた。
- 砂浜にシロチドリと一緒にいた。9 月 28 日にも確認。
- 沖合にオオミズナギドリやアジサシの周辺を飛び執拗にアジサシを追いかけていた。
- 海岸の定置網のポールにとまっていた。
- ミヤコドリの群れの中に 3 羽のウズラシギが混じっていた。
- 動かないと芦原の中で同化しているが、採餌していたので見つけることができた。

19. 田んぼで1羽が餌を啄んでいた。
20. 田んぼで1羽だけ見かけた。
21. 今年もメジロなヒドリガモが帰ってきました。2017年度の冬から今期で7年連続となりました。昨年同様、すでに雄とペアになっているようです。10/28に確認したときにはいなかったのがこの1週間の間に渡ってきたのだと思います。昨年は11/2に確認しましたのでだいたいこの時期に帰ってくるのでしょう。
22. 今シーズン、初の飛来。後続が入ってくるでしょう。漁師町でのコクガンは10年ぶり。



アオサギ：今西 純一



イカルチドリ：沢本 浩志



ウミネコ：鈴木 健真



トウゾクカモメ：笹間 俊秋



ウミネコ（足環）：鈴木 健真



アカエリヒレアシシギ：中西 章



コシアカツバメ：沢本 浩志



カラフトアオアシシギ：沢本 浩志



タカブシギ：沢本 浩志



オオアジサシ：笹間 俊秋



ノビタキ：沢本 浩志



ツバメ（白化個体）：山下 博寿



チュウジシギ：西村 四郎



コクガン：今井 光昌



ウズラシギ：笹間 俊秋



ヒドリガモ：今西 純一



ハジロコチドリ：笹間 俊秋

理事会報告



2023 年 8 月 26 日 (土) 津市安濃中公民館 出席：8 名 欠席：6 名

【協議事項】

1. 木曽岬干拓地整備事業 (第 2 期) の環境影響評価準備書に対する意見書について了承された。
2. 来年度開催予定のチュウヒサミットについて
日程： 2024 年 11 月 23 日 (土) 午後
場所： 名市大 または、名城大 (愛知県支部にまかせる)
内容： 種の指定種にされて以降 10 年間での変化 (繁殖状況、ねぐら情報 等)
当日のライブ配信 YouTube でできるか 論議した。
3. レッドデータブックの進捗状況など
現在 50 種のランクづけ終了、年内に全部ランクづけを終える (後 40 種)
＝以降、県がパブコメを行い来年度最終編集。
4. カワウ 7 月調査完了、情報は開示された。
問題点：契約書 秘密の保持 (片側債務)
5. タカ渡り
庭田山＝探鳥会としては中止。
御在所岳＝庭田山と両立するか？＝北勢地区で検討する。
調査員は姓名の公表
6. その他の鳥の調査検討
ウチヤマセンニュウ 鳥羽周辺 離島での調査？ 囀り録音で
カンムリウミスズメ 毎年複数回調査 鳥の確認位置を記録する。
カワアイサ (滋賀、岐阜、長野に極めて多い) 検討した結果、特に調査はしない。
ササゴイ 調査対象 (調査方法未定)
7. しろちどり印刷紙の厚さ 発送体制
カッコ内はマットコート 70 で印刷の場合のコスト
116 号 マットコート 90 24P 34,950 円 (65,020 円)
117 号 マットコート 90 32P 51,420 円 (82,800 円)
118 号 マッドコート 90 24P 34,950 円 (65,020 円)
今後マットコート 90 で印刷する。発送は事務局と分離する。119 号から北勢で発送する。
8. 会計より
インボイスに関しては 10 月 1 日から登録はしない。当面様子を見る。了承された。

事務局だより

活動の記録 (2023 年 8 月～11 月)

- 8 / 26 第 2 回理事会 (津市)
- 8 / 30 会報誌「しろちどり第 118 号」編集作業・入稿作業
- 9 月 木曽岬干拓地整備事業 (第 2 期) 環境影響評価準備書に対する意見書の送付
- 9 / 8 会報誌「しろちどり第 118 号」発行・発送作業
- 10 月 タカの渡り調査 (北勢地区・松阪地区・南勢地区)
- 10 / 29 「第 13 回くるくる環境フェスタ IN ベルファーム」に出展 (松阪地区)
- 11 / 9 木曽岬干拓地整備事業 (第 2 期) 環境影響評価準備書に関する環境保全の見地からの意見聴取会が開催 (副代表発表)
- 11 / 12 オンライン令和 5 年度連携団体全国総会が開催 (副代表参加)
- 11 / 18 第 3 回理事会 (津市)
- 11 月 会報誌「しろちどり第 119 号」編集作業・入稿作業

「第13回くるくる環境フェスタ IN ベルファーム」に参加しました！

玉城町 西村 泉



松阪市農業公園ベルファームで4年ぶりに開催されたイベントに出展しました。昨年も計画されましたが台風のため中止、今年は台風時期を外し秋の開催になりました。

10月29日(日)良いお天気に恵まれ、朝からたくさん家族連れがきて、バードウォッチングや缶バッチづくりの体験を楽しみました。

バードウォッチング体験の希望者には双眼鏡を貸し出し、近くの池で水鳥を観察していただきました。ある夫婦はマガモの頭の鮮やかな色彩や、カイツブリが潜る様子に驚いていました。子どもさんには缶バッチづくりが人気で、お気に入りの「野鳥」缶バッチが完成すると親子で喜んでいました。松阪地区の皆さん、お疲れさまでした。



探鳥会予告



- 肱江川探鳥会 1月14日(日)
集合／10:00 肱江川 猪飼橋 南詰め
- 上野森林公園 1月21日(日) 小雨決行！
集合／9:30 上野森林公園 第2コテージ駐車場
- 木曽三川探鳥会 1月23日(火)
集合／9:00 桑名市 多度大社前駐車場付近
- 北勢中央公園探鳥会 1月27日(土) 小雨決行！
集合／9:30 西駐車場 自販機付近
- 大淀海岸探鳥会 1月28日(日) 小雨決行！
集合／9:30 大淀小学校前 業平の松公園
- 木曽岬干拓地探鳥会 1月28日(日) 雨天決行！
集合／9:00 愛知県 弥富野鳥園
- 鈴鹿青少年の森探鳥会 2月3日(土) 小雨決行！
集合／10:00 管理事務所前 (プレハブの建物)
備考／**参加予約必要**
鈴鹿市環境政策課 059-382-9014
- 久居・神戸の里山林道探鳥会 2月4日(日) 小雨決行！
集合／9:30 みえ里山自然ふれあいの会駐車場
- 五十鈴川周辺探鳥会 2月18日(日)
集合／8:00 五十鈴公園利用者駐車場
- 高松海岸探鳥会 2月23日(金) (祝)
集合／10:00 川越緑地公園 公園駐車場
- 御代橋カモ類探鳥会 2月25日(日) 小雨決行！
集合／9:30 御代多目的集会所
- 木曽岬干拓地探鳥会 2月25日(日) 雨天決行！
詳細は1月28日と同じ
- 身近な冬鳥を観察しよう 3月2日(土)
集合／9:30 三重県総合博物館 2階 エントランスホール
備考／**参加予約必要**
三重県総合博物館 059-228-2283 雨天・強風は中止
- 石垣池探鳥会 3月3日(日)
集合／10:00 石垣池駐車場横
- 海蔵川で鳥見ing!(バードウォッチング) その4
3月12日(火) 小雨決行！
集合／9:45 海蔵川代官橋 北詰
- 阪内川探鳥会 3月16日(土)
集合／9:30 鈴の森公園 (図書館前の噴水)
- 宮リバー公園探鳥会 3月23日(土) 初心者歓迎！！
集合／9:30 バザールわたらい前駐車場
- 三滝川かんさつ会 3月23日(土) 小雨決行！
集合／9:30 大羽根グランド駐車場
- 木曽岬干拓地探鳥会 3月24日(日) 雨天決行！
詳細は1月28日と同じ

探鳥会報告 (2023 年 8 月～2023 年 10 月)



●御在所岳探鳥会 天候不安で中止

2023 年 8 月 5 日 (土) 9:00～11:00

菰野町 御在所岳

笹間俊秋 近藤義孝

台風の影響で朝から雨が降り、9 時には止んでいましたが、1 日中雷雨の危険性があったため探鳥会自体は中止しました。それでも 9 名の方に集まってもらったので、ロープウェイで山頂まで上がり、見どころを説明して解散となりました。ロープウェイで上る際に上空をハチクマが旋回していました。

●木曽岬干拓地探鳥会

2023 年 8 月 27 日 (日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曽岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

笹間俊秋 参加者 6 名 (会員 5 名)

ホシハジロ (1)、キジバト (5)、カワウ (58)、ゴイサギ (1)、アマサギ (44)、アオサギ (15)、ダイサギ (12)、チュウサギ (60)、コサギ (2)、ケリ (4)、コチドリ (1)、クサシギ (1)、イソシギ (2)、ミサゴ (2)、トビ (2)、サシバ (1)、チョウゲンボウ (1)、ハシボソガラス (50)、ハシブトガラス (10)、ヒバリ (4)、ショウドウツバメ (10)、ツバメ (30)、メジロ (1)、セッカ (19)、ムクドリ (20)、イソヒヨドリ (1)、スズメ (60)、ハクセキレイ (6)、カワラヒワ (15)、ホオジロ (4)、ドバト (50) 計 31 種

天気が良く暑い日になりましたが、風があり過ごしやすかったです。サギ類は多かったですが、まだ渡りの時期には早かったので鳥の種類は少なかったです。それでもサシバが上空を旋回してくれました。

●海蔵川で鳥見 ing! (バードウォッチング) その 2 雨天中止

2023 年 9 月 12 日 (火)

四日市市西坂部町 海蔵川沿い



ズグロカモメ

●五主探鳥会

2023 年 9 月 16 日 (土) 10:00～12:00

松阪市 五主海岸

吉崎幸一 中村真理子 参加者 23 名 (会員 20 名)

カルガモ、カイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、バン、ケリ、オオソリハシシギ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオアジサシ、ミサゴ、トビ、カワセミ、モズ、ハシボソガラス、ツバメ、ムクドリ、スズメ、ハクセキレイ、ホオジロ、ドバト 計 26 種

真夏日の強い日差しの中での探鳥会になりました。シギ・チドリはここ数年の種類や数の少ない状態が続いていますが、水際に 1 羽のトウネンが観察できました。徐々に広がっていく干潟にはカワウ、ウミネコの群れが見られ、南の方から海上をオオソリハシシギが列になって飛んできて、12 羽干潟に舞い降りました。上空をトビやツバメが飛び回り、海ではミサゴの他、沖の並んで立っている竹にはウミネコに混じってオオアジサシが見られました。池ではサギ類の他 1 羽のバンの幼鳥の泳ぐ姿が観察できました。

●庭田山タカ渡り探鳥会 道路工事の為中止

2023 年 9 月 23 日 (土・祝)

海津市 庭田山頂公園

●木曽岬干拓地探鳥会

2023 年 9 月 24 日 (日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曽岬干拓地

共催団体/愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者 8 名 (会員 8 名)

カルガモ (2)、ホシハジロ (1)、カイツブリ (5)、キジバト (6)、カワウ (15)、アオサギ (7)、ダイサギ (15)、チュウサギ (2)、コサギ (4)、オオバン (1)、コチドリ (2)、クサシギ (2)、イソシギ (6)、ミサゴ (2)、トビ (4)、カワセミ (1)、チョウゲンボウ (1)、モズ (3)、ハシボソガラス (25)、ハシブトガラス (1)、ヒバリ (4)、ツバメ (5)、メジロ (5)、セッカ (3)、ムクドリ (8)、ノビタキ (2)、イソヒヨドリ (1)、スズメ (100)、ハクセキレイ (5)、セグロセキレイ (1)、カワラヒワ (15)、ホオジロ (1)、ドバト (72) 計 33 種

先月まで田んぼにいたチュウサギはすっかりいなくなっていました。水路にはコチドリやイソシギなどが餌をとっています。杭の上にはノビタキがおり渡りの季節だと実感できる探鳥会となりました。

●伊勢タカ渡り探鳥会

2023年9月30日(土) 7:30～10:30

伊勢市 やすらぎ公園

中西 章 濱口雅也 参加者 28 名(会員 16 名)

キジバト、ハチクマ(1)、トビ、ツミ(1)、サシバ(12)、ノスリ(1)、アオゲラ、サンショウクイ(亜種リュウキュウサンショウクイ)、モズ、ハシブトガラス、ヤマガラ、ツバメ、ヒヨドリ、メジロ、イソヒヨドリ、エゾビタキ、キビタキ、キセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、計 20 種

探鳥会開催日まで、ずっと晴天続きで、東のほうもタカが飛んでいないこともあり、当日は数が見込めないことは想定していた。予想通り、サシバ 12 羽とハチクマ 1 羽で数は少なかったが、肉眼で観察できる距離だったこともあり、遠くて数多いタカよりも、見た感があった。小鳥類は、なかなか姿を見ることが難しかったが、渡りの小鳥ではリュウキュウサンショウクイや、エゾビタキ、キビタキなど確認できた。

2023年10月1日(日) 7:30～10:30

伊勢市 やすらぎ公園

中西 章 濱口雅也 参加者 15 名(会員 11 名)

カルガモ、キジバト、ダイサギ、ミサゴ(1)、トビ、ハイタカ(1)、サシバ(15)、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、ツバメ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、キセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ 計 18 種

昨日よりも、東のほうでタカが飛んでいたこともあり、今日こそは期待できるかもと、タカが出現するのを待っていたが、8 時台、9 時台も現れず、地付きのまだ渡っていないサシバ 1 羽で終わるのかと思っていた矢先、10 時台になって、やっと 10 羽と 5 羽のサシバ群れが出現し、ミニ鷹柱となった。それにしてもタカ渡り探鳥会の 2 日間で、合計 28 羽とはあまりにも寂しい結果となった。



ハヤブサと追うハイタカ

●市木川河口および水田探鳥会

2023年10月1日(日) 9:00～12:00

南牟婁郡御浜町市木 市木川河口

共催団体/御浜町、環境省近畿地方環境事務所

笹間俊秋 参加者 10 名(会員 7 名)

カルガモ、キジバト、カワウ、アオサギ、ヒメアマツバメ、イソシギ、ミサゴ、トビ、カワセミ、コゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ツバメ、コシアカツバメ、イワツバメ、ヒヨドリ、ムクドリ、ノビタキ、イソヒヨドリ、スズメ、キセキレイ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、ドバト 計 26 種

少々暑い日でしたが、上昇気流に乗ってトビが旋回していました。その周辺を 50 羽近くのヒメアマツバメが飛んでいました。田んぼの畦の草にはたくさんのノビタキが虫を追いかけていて、みなさん夢中で観察されていました。

●みつえ高原牧場タカ渡り探鳥会 雨天中止

2023年10月1日(日)

奈良県宇陀郡御杖村菅野 みつえ高原牧場

●高見タカ渡り探鳥会

2023年10月7日(土) 9:20～11:00

松阪市飯高町木樨

西村四郎 中村真理子 参加者 20 名(会員 16 名)

アオバト、ハチクマ、サシバ、モズ、カケス、ヤマガラ、ヒガラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ノビタキ、エゾビタキ、ソウシチョウ 計 12 種

昨年場所より見晴らしがよい場所を発見したのでそちらで行いました。峠の手前 3km 位の所です。かなり見晴らしが良く、良く見えたけど、広すぎて見つけるのが大変でした。サシバとハチクマ、ノビタキ、エゾビタキの渡り組に、カケス、アオバト等の居付組が賑わせてくれました。11 時に一旦は終了しましたが、その後も次々と渡りは続き、14 時頃まで、サシバ 198 羽、ハチクマ 3 羽を確認しました。ほとんどが遠かったですが、中には近くを飛ぶものもあり、感激でした。

●木曽岬干拓地探鳥会

2023年10月22日(日) 9:00～12:00

愛知県弥富市 鍋田干拓地・木曽岬干拓地

共催団体／愛知県野鳥保護連絡協議会

近藤義孝 笹間俊秋 参加者 11名(会員 11名)

カルガモ(15)、ハシビロガモ(3)、コガモ(40)、ホシハジロ(1)、キジバト(2)、カワウ(20)、アオサギ(6)、ダイサギ(22)、オオバン(3)、クサシギ(2)、イソシギ(1)、ミサゴ(10)、トビ(8)、チュウヒ(1)、ハイタカ(2)、オオタカ(1)、ノスリ(1)、カワセミ(1)、チョウゲンボウ(1)、モズ(15)、ハシボソガラス(30)、ハシブトガラス(5)、ヒバリ(8)、ツバメ(20)、ヒヨドリ(25)、ウグイス(1)、メジロ(6)、セッカ(1)、ムクドリ(2)、ジョウビタキ(3)、ノビタキ(10)、スズメ(300)、ハクセキレイ(150)、セグロセキレイ(1)、カワラヒワ(5)、ホオジロ(5)、ドバト(30) 計 37種

良く晴れた秋空が広がり、上昇気流に乗ってトビやオオタカ、ハイタカ、ミサゴが飛んでいました。特にハイタカはまだ若鳥のようでカラスにちょっかいをかけられていました。干拓地の中ではチュウヒが舞っていました。



ミサゴ

編集後記

今井光昌さんのシギ・チドリ連載が本号を持って終わった。今井さん、長い間ご苦労様。

かつて鳥類学者は撃ち落とした鳥を標本にして夏羽、冬羽、幼羽など羽衣の変化を調べた。そのためには猟師と剥製師の協力が必要。鳥類学は庶民には手の届かない学問であった。戦後、それができなくなり、かすみ網を張って生きた鳥を捕まえ、調べてから放鳥するようになった。しかし、網でシギ・チドリは捕まえることが大変むずかしい。捕獲できる技術者は日本でもごく少数である。

昨今のレンズ、カメラの進歩で、野外でも鮮明な画像を得ることができるようになった。撮影機器そのものは高価だが、かつてのようにフィルムに多大な出費を迫られることもない。あとは、得られた画像をいかに整理し、羽衣の変化を追うか、根気しだいとも言える。シギ・チドリの羽衣の変化は、まだまだ分からないことが多い。日本で見ている限り、通過する一時期を見てるだけである。繁殖羽、すなわち夏羽が見られるのが極めて稀な種もある。繁殖地ではどんな姿をしているのか？ 今井さんのやってきた試みをさらに深める若い人が出てきてほしい。

(M.H.)

しろちどり 119号

2024年1月1日発行

題字：濱田 稔

表紙絵：小坂 里香

カット：平井 正志

編集：平井 正志・笹間 俊秋・三曾田 明

発行所：日本野鳥の会三重

平井 正志 方

〒514-2325 津市安濃町田端上野 910-49

ホームページ <http://miebird.org/>

印刷：株式会社プリントパック

〒617-0003 京都府向日市